

# 栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	北海道
再委託先	当麻町

## 1 事業推進の体制

実践中心校	当麻町立当麻小学校
協力校	当麻町立宇園別小学校、当麻町立当麻中学校
関係機関	当麻農業協同組合、当麻小学校PTA

## 2 具体的な取組等について

テーマ1	体験活動を取り入れ、食に関する指導を充実させるための方策
評価指標	指標①：朝食欠食率（小学校3%、中学校5%） 指標②：給食の残食率（小学校3%）
効果	アンケート等を実施し、食に対する子どもの現状を適切に把握し、子どもの実態に応じた食に関する指導を充実することにより、子どもや保護者の食に対する興味関心が高まり、食生活の改善につながった。

### （取組状況）

#### （1）体験活動を取り入れた食に関する指導の年間指導計画の見直し

- ・「食に関する指導に係る全体計画」において、全学年の各教科（社会科、理科、生活科、家庭科、体育科）、道徳、総合的な学習の時間、特別活動等の食育に関わる内容等を抽出し、それらを年間を通しての一覧表に整理した。また、新たに、第3学年総合的な学習の時間「でんすけすいかを育てよう」を加えた。

#### （2）体験活動を取り入れた食に関する指導

##### ① 第3学年総合的な学習の時間「でんすけすいかを育てよう」

今年度は、「当麻町そ菜研究会でんすけ部会」が結成30周年であり、その記念事業として、第1、3学年が生活科と総合的な学習の時間に「でんすけすいか」の定植・観察・収穫などを体験した。

##### ア 定植（6月）

でんすけ部会長他部会員3名、当麻農業協同組合の御協力をいただき、圃場として準備した教材園にでんすけすいかの苗を各学年4本ずつ定植した。ほとんどの児童が、食べたことはあるが、実際に苗を見るのは初めてであった。もちろん、苗を植えるのも初めてであったが、部会員の皆さんの具体的な指導の下、有意義な体験ができた。



##### イ 生育観察（6～8月）

定植後、水やりを行うとともに、生育観察を行った。水やりのポイントとして、つるを踏まないこと、忘れずに定期的に行うこと、虫や病気に注意することの3点を教わり、最も大切なこととして、「お父さん、お母さんの気持ちになって」観察をすることと説明された。児童は、説明を受けたとおりに、夏季休業中も生育観察を行った。



## ウ 収穫（8月）

収穫は、夏季休業明けのよく晴れた日に行った。それぞれの学年で植えた4本の苗から5玉以上の収穫があり、児童は大喜びした。家庭科室に移動し、穫れたてのスイカを試食した。自分たちで「お父さん、お母さんの気持ちになって」水やり等を行ったすいかの味は甘く、児童の感動を生んだ。



普段、何気なく食べているすいかであるが、収穫の喜びとともに、生産者の苦労や栽培の楽しさを体験した。

## ② 第5学年総合的な学習の時間「田んぼの教室」

本校では、当麻土地改良区の御協力をいただき、毎年、第5学年が総合的な学習の時間に「田んぼの教室」と称した、一連の稲作体験、かんがい用水などの農業施設見学、生き物観察、地域農業の歴史に関わる学習を行っており、今年で、11年目になる。

### ア 稲の育成観察（5月）

育成栽培は、ハウスの中で育てられている稲を中心に行い、1本の苗が分けられ、株が大きくなっていくことや収穫量など、お米のできるまでを学んだ。米づくりは、雪の残る3月からはじまり、収穫は9月頃となる。農家の方は、約半年かけて大切に米を育てているという説明などから、米づくりの苦労を知ることができた。



### イ 田植え体験（6月）

晴天となった日に、当麻土地改良区から4名の外部講師を招き、田植え体験を行った。ほとんどの児童が、田植えは初めての体験であった。最初は、おそるおそる水田に足を踏み入れていたが、水田の土がドロドロであることを肌で感じながら、丁寧に8.2アールの水田に苗を植えることができた。



### ウ 収穫（9月）

秋、やや肌寒い気温であったが、当麻土地改良区から8名の外部講師を招き、稲刈りの仕方について学んだ。ほぼ乾いた状態の田に入り、鎌を使い一株ずつ丁寧に収穫を行った。刈った後は、藁で縛り、はさかけた。児童が、心を込めて栽培したことに加えて、今年は、天候にも恵まれたことから、多くの収穫があった。



### エ おにぎりパーティー（12月）

参観日に保護者の協力を得て、収穫した新米を用いて、おにぎりを握り、試食した。今年収穫できた数量は15kgであった。

精米したて、炊き立てのお米で握ったおにぎりの味は格別であり、自分たちで収穫したお米を食べるという喜びを味わうことができた。

## ③ 栄養教諭による学級活動の時間における食育の授業

栄養教諭が、特別活動の時間に全学級で年に1回食育の授業を行ったことで、児童の食に関する興味や関心を高めることができた。



ア 第2学年学級活動「飲み物について考えよう」

普段、飲む機会が多い飲み物に着目した授業を行った。授業では、子どもが普段飲んでいる清涼飲料水を7種類用意し、その中に含まれている砂糖の量を実際の砂糖を用い、可視化し提示した。飲む時は、気付かない砂糖の量の多さに児童は驚き、その後、一日に必要な砂糖の量や砂糖を取りすぎると体にどんな症状が出てくるかについて学んだ。また、炭酸飲料に含まれるリンの取りすぎることによる体への影響も学んだ。

イ 第5学年学級活動「元気のなる朝ごはん」

本授業は、研究授業として実施し、当麻町食育推進委員にも参観していただいた。

朝食のはたらきを、「3つのスイッチ」とし、それぞれのはたらきと主な食材について説明した。

- ・からだのスイッチ  
体温を上昇させるもの  
肉・魚・卵・豆腐・牛乳など
- ・あたまのスイッチ  
脳のエネルギーになるもの  
ご飯・パン・麺類など
- ・おなかのスイッチ  
排便を促進するもの  
野菜・果物・きのこなど

その後、食べ物カードを用い、グループでバランスの取れた朝食になるように献立を考え合った。

話し合いでは、「3つのスイッチが入るような食べ物を食べたい」「今まで朝ごはんを食べていなかったから、これからは食べるようにする」など食生活の改善に対する意欲の向上が見られたため、それぞれ朝食の改善について個人目標を設定し、家に帰って保護者と話し合うこととした。



(3) 体験活動を生かした学校給食の取組

① 当麻米をたくさん食べよう

新米や新品種米の提供など、学校給食と家庭での食事を関連付け、地場産物の活用を促進を図る取組を行った。

② 地場産の野菜や果物を食べよう

きゅうり、ほうれん草、長ねぎ、ピーマン、トマト、なす、じゃがいも、いんげん、ミニトマト、でんすけすいか、いちごなど可能な限り当麻産の食材を給食に使用し、献立だよりで栄養素などについて啓発を行った。

(4) 「食」に関する実態調査の実施

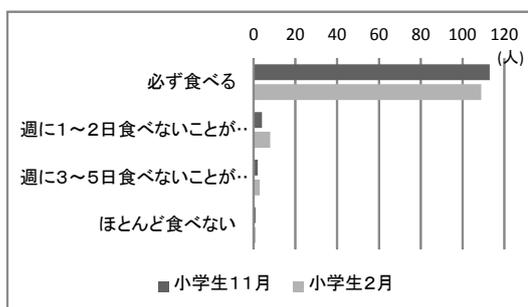
① 「食」に関する実態調査アンケート

学校給食に対する意識や家庭における食生活等の実態を把握し、改善・充実に向けた啓発を行うことを目的に、本校の全学年、実践協力校の宇園別小学校の第5、6学年及び当麻中学校の全学年の保護者を対象に11月と2月にアンケート調査を実施した。

問2 あなたは、毎日朝食を食べますか。

項目	小学生11月	小学生2月
必ず食べる	113	109
週に1~2日食べないことがある	4	8
週に3~5日食べないことがある	2	3
ほとんど食べない	1	1
	120	121

項目	中学生11月	中学生2月
必ず食べる	98	100
週に1~2日食べないことがある	13	10
週に3~5日食べないことがある	4	5
ほとんど食べない	2	4
	117	119

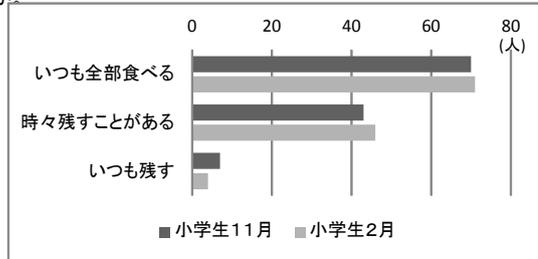


問6 あなたは、学校給食で出された食べものは全部食べますか。

項目	小学生11月	小学生2月
いつも全部食べる	70	71
時々残すことがある	43	46
いつも残す	7	4
	120	121

項目	中学生11月	中学生2月
いつも全部食べる	54	44
時々残すことがある	46	60
いつも残す	17	15
	117	119



- ・「朝食をほとんど食べない」児童生徒は少なく、小学生1名と中学生4名であった。
- ・「朝食を食べない理由」は、「食欲がないから」「食べる時間がないから」と回答している児童生徒が多かった。
- ・「学校給食で出された食べ物をいつも全部食べる」児童は58%、生徒は46%であった。
- ・「学校給食を残すときの理由」は、「嫌いなものがあるから」「量が多すぎるから」と回答している児童生徒が多かった。
- ・「当麻町でとれる食べ物にはどんなものがあるか知っていますか。」では、多くの児童生徒が「米」「すいか」と回答し、続いて「トマト」「メロン」「きゅうり」などの回答があった。

## ② 学校給食の残量調査 (11月と2月)

- ・11月の調査は、本事業における体験的な学習等により、児童の食に関する意識が高まったり、給食に対する学級での指導が行われたりしたことにより連年より残量が少なかった。また、調査終了後もこの傾向が継続した。
- ・2月の調査では、体験的な活動から時間が経過していたが、児童が主体的に食を大切にす意識や態度が身に付いてきたため、11月調査と大きな差はなかった。
- ・嗜好による残量の差があり、白飯、和風の煮物、和え物は残量が多かった。

## ③ 地場産物の活用調査 (11月と2月)

- ・11月と2月を比較すると、2月は道内産の野菜の種類が減り、国内産の割合が増えた。
- ・当麻産は一年を通して米を使うために平均的である。初夏から初秋にかけては、野菜類も出回るため割合は上昇した。
- ・道内産の割合は11月は42%、2月は26%であった。

## (5) 「食」に関する啓発活動

### ① 給食だよりの工夫

当麻町では、当麻町学校給食センターで作成した「給食だよりの」を町内の幼稚園1園、小中学校3校の家庭に配布している。毎月発行している「給食だよりの」は、牛乳以外の献立をひらがなで表記し、小学生以上の児童・生徒が読むことができるようにしている。また、主な材料を3つに分類し、栄養的にも理解されやすいような構成にしている。裏面には「えいようだよりの」を掲載し、食事のマナーや正しい食生活について、高学年から保護者向けに情報を発信している。低学年・中学年については保護者と一緒に読むことで家庭との連携を図り、食育の広がりをおねらっている。

### ② 校内掲示の充実

保健室前の掲示版に「もぐもぐひろば」を設け、養護教諭と連携して、からだと食に関する内容を掲示し、健康に過ごすためには食事が大きく関わることの啓蒙に努めた。児童が興味・関心を示すように掲示物を立体にし、「めくる」「ひきぬく」「広げる」などの操作をできるようにした。



## (6) 先進地視察

- ① 視察地・視察日・参加者
  - ・視察地 比布町立中央小学校
  - ・視察日 平成26年1月15日(水)
  - ・参加者 当麻町食育推進検討委員5名
- ② 視察内容



比布町は人口約4000人、旭川市の北約15kmに位置し、農業の盛んな町である。特に、米といちごの栽培が盛んで、例年、いちご狩りも行われている。町内には小・中学校が各1校ある。平成11年度に各校に給食施設を設置し、町単独で学校給食を開始した。自校方式のため、配送がないことから、給食時間直前まで作業が可能であり、温かい給食を提供している。

今回視察した中央小学校では、3名の調理員で約200食の調理を行っている。炊飯施設や各種調理器具が揃っているため、多彩な献立を調理することが可能である。

また、比布産のイチゴやそのイチゴを用いたジャムパン、比布産の米粉を用いたパンなど地場産物を活用した献立、「米米週間」と称し、比布産の色々な種類のお米を味わう機会の設定、セレクト給食や給食試食会の実施など、特色ある学校給食を実施している。

## 3 事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- ・食育推進検討委員会に農業協同組合職員、生産者が加わったことにより、専門的な助言をもらうことで、栽培活動に生かすことができた。
- ・本校の児童は、当麻町で生産される農作物に関して理解している児童が多かったが、体験活動を通して「でんすけすいかが広く高級果物として認知されている」ことや「当麻米が12年連続全道一」、「きゅうりの作付け面積全道一」などを知ることによって、郷土に誇りをもち、さらに地域の農業について調べたいという気持ちを高めることができた。
- ・生産農家の努力や工夫、地域とのつながりなどを知ることによって、生産者への感謝の気持ちが育まれ、給食の残食率が減少した。
- ・体験学習を通して食に関する関心が高まり、児童が給食や食事について話題にすることが多くなった。
- ・栄養教諭による食育の授業や啓発活動により、食に対する関心や興味の高揚がみられた。

## 4 今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

- ・体験活動を総合的な学習の時間で実施しているが、食に関する指導の年間指導計画で各教科との関連性をより明確にする必要がある。
- ・食に関する指導の年間指導計画に「家庭・地域との連携」を記述し、家庭や地域と連携した取組を位置付ける。また、「献立作成配慮事項」も記載し、食に関する指導と学校給食との関連付けを積極的に図る必要がある。
- ・家庭での食育をさらに充実させるために、保護者を対象にした講演会や講習会などを実施する必要がある。
- ・保護者が学校給食の献立や栄養のバランス、食事と健康、望ましい食習慣や生活習慣などについて理解できるように、実際に食べたり、調理したりする機会を設ける必要がある。
- ・栄養教諭が、地域の生産者や関係機関、食に関する行事等についての情報収集を行い、得た情報を教職員に紹介して、地域との連携推進を図る必要がある。